

中国軍、米国西海岸まで届く対艦弾道ミサイル配備

インド太平洋が「黒海」化し、水上艦艇への脅威は甚大

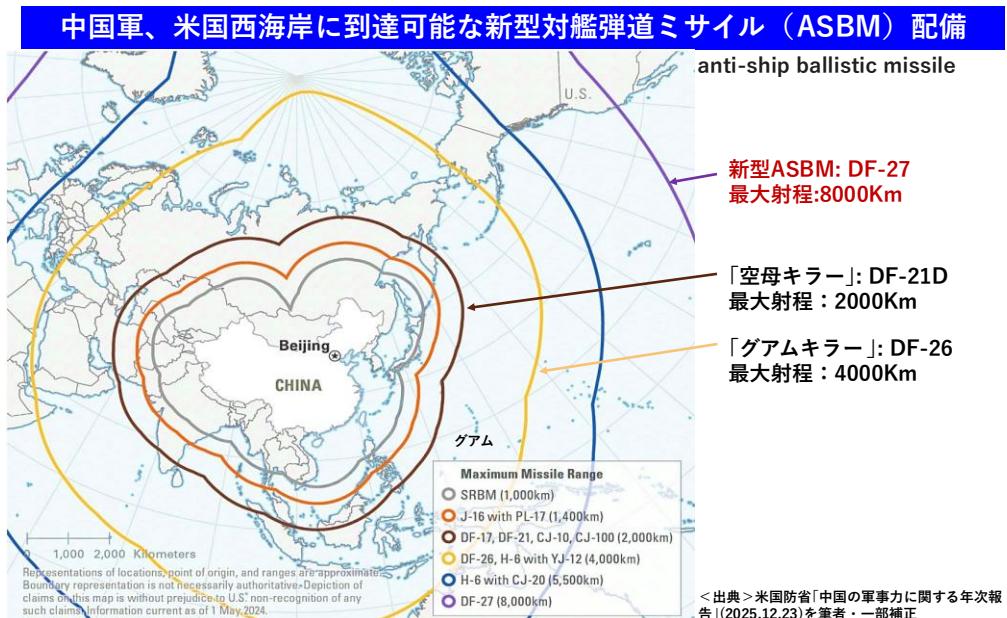
樋 口 譲 次

○中国軍、新型のDF-27対艦弾道ミサイルを配備

米国防省が12月23日に公表した「中国の軍事及び安全保障動向に関する年次報告書」によると、中国軍のミサイル部隊が米国西海岸にまで到達可能な新型の対艦弾道ミサイル(ASBM)DF-27を運用していることが明らかになった。

同報告書によると、DF-27は5000~8000キロ離れた陸上および海上の標的を攻撃できるといい、その攻撃能力が初めて公表された。

その攻撃能力を示したのが下記の要図であり、インド太平洋地域全体と米国西海岸の大部分をカバーする様子が描かれている。



中国軍のASBMは、これまで「空母キラー」DF-21Dと「グアムキラー」DF-26対艦弾道ミサイルの配備に代表的され注目を集めてきた。その他にも、巡航ミサイルや超音速ミサイル、極超音速ミサイルの存在が指摘されている。今年の中国の軍事パレードでは、多数の空中発射型および海上発射型の対艦システムも披露された。

それらにDF-27が加わったことは、従来の第1列島線と第2列島線を睨んだ「接近阻

止・領域拒否（A2/AD）」能力をはるかに超越し、太平洋のほぼ全域からインド洋に至るまで、敵対国の外洋海軍戦力を抑止・撃破する能力を高めたことを意味する。いわば「インド太平洋キラー」の出現である。

中国軍の A2/AD 能力は、より多様化し、より高度化・広域化したと受け止められ、インド太平洋がウクライナ戦争における「黒海」に縮小されたと言っても過言ではない。

ミサイルが有効射程を伸ばし精密度を上げ、センサー類の感度が向上して艦艇に隠れる場所がなくなってきた。

もはや海洋は広大な戦場ではなく、空母などの水上艦艇は「砂漠の中の戦車」のように、ASBM にとっては大きな目標にすぎず、強力な脅威に曝されることになりそうだ。

○黒海で行動の自由を奪われたロシア艦隊

ロシアのウクライナ侵攻が始まった約 2か月後の 2022 年 4 月、ロシア黒海艦隊の旗艦であった巡洋艦「モスクワ」が、ウクライナ軍の「ネプチューン」対艦ミサイルの攻撃を受け撃沈されたのは記憶に新しい所である。

その後、ウクライナ軍は、国産の自爆型無人水上艇「マグラ V5」や長距離対艦ミサイルを駆使した攻撃を行い、大型揚陸艦「ツェーザリ・クニコフ」（2024 年 2 月撃沈）や哨戒艦「セルゲイ・コトフ」（2024 年 3 月撃沈）など、ロシア艦隊は多数の艦艇を喪失した。

そのためロシア艦隊は、黒海艦隊司令部のあるクリミア半島セヴァストポリから一部の艦艇をノヴォロシースクなど他の港へ移動せざるを得ない状況に追い込まれた。

これにより、ロシア軍は黒海北部および中西部における制海権や航空優勢を維持することが困難になっている。

米国の有力研究機関である戦略予算評価センター（CSBA）の所長アンドリュー・クリーネビッチ氏（当時）は、その論考「成熟した精密攻撃態勢下での海洋覇権」（“Maritime Competition In A Mature Precision-Strike Regime”、2015 年）で、次のように喝破していた。

- ・ミサイルが有効射程を伸ばし精密度を上げ、センサー類の感度が向上し艦艇に隠れる場所がなくなってきた。空母から反撃できないほどの長距離から空母を狙う巡航ミサイルを潜在敵国が発射できる。現時点でも空母は大きな目標にすぎず、水上艦艇には大きな役割は期待できない。もはや海は広い舞台ではない。海戦も大きく変わる。
- ・第 2 次大戦ではミッドウェイで日米が空母部隊の索敵に広い太平洋で苦労した。地中海では枢軸側と連合国側の艦艇は簡単に発見され、陸上基地からの（航空機による）爆撃で大損害を受けた。現在の技術で太平洋は地中海の大きさに縮小されるといつてよい。

- ・「接近阻止・領域拒否（A2/AD）」地帯が大洋に広がり、アクセス不可能な領土や海域が増え、双方にとってこの地帯では深刻な損害を覚悟しなければならなくなる。海洋の大部分が事実上通行不可能な危険地帯になる。一番簡単なのは現地派遣をあきらめることだ。
 - ・最終的に米軍部隊は（中国大陸に）接近せざるを得ない。ただし敵が長距離兵器を使い切った場合、あるいは我が敵の長距離兵器を制圧・弱体化した場合に限るが。
- （以上、括弧は筆者）

このクレピネビイッチ氏の指摘が、中国の新型 ASBM の展開によって、黒海で見られるように、いまインド太平洋で現実問題として表面化しているのだ。

この地域には、米第 7 艦隊と日本など同盟国の海軍部隊の大半が駐留している。米西海岸にはカリフォルニア州サンディエゴを拠点とする第 3 艦隊が展開しており、DF-27 による影響は避けられない。

DF-27 をはじめとする中国軍の ASBM は、インド太平洋の大部分の水上艦艇にとって強力な脅威となり、その行動は大きく制約される可能性が高まった。

中でも DF-27 が、米国と中国の間の「海軍力のバランスを劇的に変える」ゲームチェンジャーの役割を果たそうとしているとき、米国や日本などの同盟国は困難とされるその脅威にどのように対処すればよいのだろうか。

○対中防衛体制の強化を急げ！！

まず、米海軍が採用しているのが「分散型海洋作戦（DMO）」である。

中国軍の ASBM の飽和攻撃による損害を回避し、戦略的優位性を維持し海上優勢を獲得するため、海上部隊を広域に分散・機動させ、兵器システムのネットワーク化によって戦力を集中・統合し中国軍に対抗する作戦構想だ。

これと連動して、米海軍は海兵隊による「遠征前進基地作戦（EABO）」、そして海軍と海兵隊混成の沿岸戦闘群（LCG）による「紛争環境下における沿海域作戦（LOCE）」を展開する。

EABO は、第 1 列島線周辺の島嶼に対艦・対空ミサイル等による阻止の壁（バリアー）を構築し海軍の海上優勢の獲得に寄与する作戦である。

LOCE は、中国海軍の戦力をある程度制圧・弱体化させた後、まだ紛争環境下にある沿海域に進入して敵を撃滅する作戦である。

また、日米両軍は、中国に対し優位と見なされている潜水艦戦や機雷戦などの「水中戦」を重視する戦い方を強化している。米国は、対中作戦の最前線基地であるグアム専用の防空網の構築を行うとともに、同盟国と共に弾道ミサイル防衛力の強化にも重点投資している。

さらに、米国防省の「レプリケーター（Replicator）」構想に基づき、中国の台湾侵攻に当たり、米軍が数千の無人機や無人艇などを配備し、対艦ミサイルや潜水艦などの活動と連携

することで、台湾海峡に「無人の地獄絵図」を作り出す「地獄絵図」戦略（「ヘルスケープ（Hellscape）」戦略）を推進している。

一方、例えば、ASBM が空母を無力化するには、広大な海洋における空母の位置を正確に把握し、空母機動群に属するイージス艦のミサイル防衛網を突破する能力が必要である。

それを具備していると仮定すれば、技術的にはミサイルが着弾するまでのキル・チェーンを破壊することが必要である。

まずは、ASBM の指揮統制（C2）システムなどに対するサイバー攻撃が有効である。また、ISR センサーが空母等の目標を捜索する段階において電波管制や電子妨害により、位置情報の取得を困難にすることや、位置情報の伝達手段（ネットワーク）を妨害する方法がある。電子妨害やデコイをもって ASBM 弾頭部のレーダーの誘導を欺瞞し、同システムを機能不全に陥れることなども 1 つの方法である。

他方、対処手段だけでなく抑止手段も必要である。そのためには、中国の艦艇を海軍基地内、あるいは可能な限りその近傍海域において撃沈し無力化する ASBM 能力を我も保持することだ。中国が用いた手段を逆手に取り、同じ手段で対抗し戦略バランスを回復するのである。

我が国は、DF-27 以前に、すでに中国の短距離弾道ミサイル（SRBM）及び中距離弾道ミサイル（MRBM/IRBM）の射程内に入っている。前掲要図の通り、幾重にも ASBM の脅威に曝されており、その度合いは米国と比較にならないほど深刻である。

そのため、同盟国・米国の軍事戦略・作戦構想との融合を図りつつ、弾道ミサイル防衛の実効性を一段と高めなければならない。同時に、確かな敵基地攻撃能力の保持や水中戦の強化、対艦ミサイル、無人機・無人艇、能動的サイバー防御や電子攻撃の能力整備など、問題は山積している。

それらを解決して対処力・抑止力を強化することは、米国以上に我が国にとって必須の課題であり、防衛力の抜本的強化が急がれる所である。